西朋

都立西高山岳部OB会

1957. OCT.

13

西朋登高会

集会に対する不満

町田　明

最近明らかに失敗と云える山行が連続的に起っているが、これらは我々の今後の活動に対する赤信号と考えなくてはならない。それらの失敗の原因は幾多も考えられると思うが、こゝでそれらを一つ一つ究明しようとするのではないが、たゞ次の事だけは云えると思う。それはこゝ四年と云う年月の経過と共に会員相互の間に安易なものゝ考えが出来てしまったと云う事である。この事は山においてばかりでなく、集会において明らかに指摘出来る。

我々山岳会を組織している者にとって集会の重要性は山行と同等と考えなくてはならない筈であるが、最近の集会の低調さは目に余るものがある。それに慣性になってしまっているのではないかとさえ感じる。この問題は従来委員会などでも採り上げられた事であるが、こゝいらで集会に新しい空気を吹き込まなければ、益々形式的なものになり、我々がチームを組織して山行をしている意義が次第に薄れて来てしまうのではないかと心配する。

さて集会の現状はどうかと云えば、出席の悪いのは云うまでもなく、その内容も事務的・形式的なものに終始している。我々の集会は事務連絡の為だけのものではない。山行報告とその検討があると云う事に注目しなくてはならない。その山行報告までも事務的に処理されているのが現状だ。報告一辺倒の山行報告でいゝだろうか。

一つの山行は下山した時に終るものではなく、集会に於て、報告、それに対する批判、反省と云う過程がなければ、失敗した山行も決して生かされてこない。

山行報告に対しては厳しい批判を期待しなくてはならないし、浴せなくてはならない。この厳しい批判がないと云う事は、全員の無関心か安易さかである。この無関心と安易さが我々を導くところは次の失敗であり、より大きな事故であろう。

厳しい批判が必要である一方、正しい批判を受け入れるだけの寛大さをもたなくてはならない。この批判とそれを受ける寛大さがあって初めて失敗した山行も生きてくると同時に、パーティーを組んで山行を行う我々にとって最も強調されなくてはならない人の和が知らぬ間にはぐくまれるのではなかろうか。

54 浅草岳・鬼ヶ面山

係・鈴木（輝）

期日・四月二八～二九日

参加者・(L)小田尚於、鈴木輝夫、岡谷　徹、成瀬泰雄

四月二八日（晴）

大白川（七、四五）―平石橋（九、三五～一〇、一〇）―九一六米三角点（一四、三〇）

未だ明けやらぬ小出に降り立った時、まだ一面に残っている雪には驚いた。これでは先が思いやられると案じながら只見線に乗り換える。終点大白川に着いて豊富な積雪に再び驚く。全く予想以上だ。五尺位もあろうか。駅際の食堂で身支度し出発。大白川の部落を過ぎると「雪崩に注意」の立札が乱立し、いよいよ雪崩の巣に近づいた事を意識する。左手は急斜面に多量の雪をつけ、右手は逆まく激流。一発喰えばそれまで。左上を横眼でニラんで歩く。危険地帯を通過すると平石橋だ。ここより先は雪の状態より見て夏路通りは適当でないと思われたので、鬼面山の少し北寄のピークより平石橋の際まで伸びている尾根（九一六米の三角点有り）にとり付くことにする。橋よりすぐ残雪を蹴込んでブッシュへ突入するもかなり手強い。消耗の度は次第に増してゆく。五百米等高線附近で力ぜを入れる。見わたせば守門岳が素晴しい白さで目前に、ずっと左に朝日岳、駒ヶ岳、又遂岳も見える。ブッシュと残雪を交互に踏んで、九一六米の三角点に到着。まだ日は高いが、先に適当な所が無いので幕営する。夜はスキヤキに舌鼓を打つ。

四月二九日（快晴）

三角点（五、三〇）―P_1（七、〇五～四五）―P_2（八、一〇～二五）―P_1（八、五〇～九、二五）―三角点（一〇、〇五～一一、三〇）―平石橋（一二、二五～三五）―大白川（一四、一五）

今日は雲一つない日本晴。雪も固くしまっている。ツイテルぞと思いながら残雪を蹴る。三角点から鬼面山まではブッシュは殆ど無く、しまった雪の上を快適に登る。（鬼ヶ面より浅草岳に向ってその中間のピークをそれぞれP_1・P_2・P_3と仮称する）この尾根を登りきった所がP_1である。初めて見る鬼ヶ面の東面は圧巻にまさるものである。雪がついているためその岩場全面を見ることは出来ないがかなりすごい。一ノ倉とまではいかないまでも大きなスケールでスッパリと切れている。上からのぞくと吸い込まれそうな谷の底には沢山のデブリが見える。写真を撮るために隣りのP_2を往復する。帰りの危険地帯を早く通過してしまいたいので浅草岳は放棄して三角点へ帰る。テント撤収後下降開始。昨日キックステップで苦労した大きな雪面が大木や土砂を混えたデブリとなって谷底に見える。そのため現われた潅木には、半乾きの土がなまなましくこびりついている。その時、轟音と共にブロックの雪崩！ナムアミダブツ。運よくラスト鈴木（輝）の一〇米位横を谷底へ転落して行った。平石橋からは雪崩の巣である。何しろ陽

はサンサンと輝き、時間も本数等の出動に絶好の頃なので往路をとるべきか、高くブッシュをこいで捲いて行くか考えた。尾根を越えるのでは今日中に帰京出来ない。社会人を交えたパーティとあってみればやむを得ず往路をとる。ヤラれるなら一人で沢山と間隔を開いて出発する。相変らず陽は強い。こうなっては上天気もうらめしくなる。デブリでガタガタの足もとと大きなブロックの沢山ある石上を半々ににらんで。ようやく危険地帯を脱した時には、ピッケルを握った手にベットリ冷汗が浮んでいた。汽車には充分時間があったので、無事生還を祝して例の食堂でビールを抜く。後にも先にもあんなに美味しいビールは無い。

（鈴木輝夫）

55 北岳

期間・五月三日～五日

参加者・(L)町田明、笹田英次、林武志、松田朝夫、関谷徹、鈴木潤

五月三日（晴）

芦安（六、〇〇）—夜叉神隧道（七、〇〇～八、〇〇）—鮎差（八、三五～八、四五）—オ一釣橋（九、二五～九、四〇）—荒川小屋（一〇、一五～一一、〇〇）—池山三角点（一四、〇五）—池山小屋（一四、一三）

昨夜の雨も上では雪か、鳳凰三山は白く輝き、目指す北岳はその麓に遥か遠い。パッキングの暇もなく臨時バスで芦安まで。夜叉神までトラックに便乗して早くも坐って居て五時間稼ぐ。三年後には広河原までバスが入ると云う。〃こゝも上高地の様になるのか〃と潤が嘆く。山ツツジと新緑が雪に代って目にしみる。鮎差までは下り一方。山行の初めが、きつい下りと云う変則のため足筋がピンピンする。野呂川の水流は流石に急で水量も多く真白になって岩を咬んでいる。久し振りの南ア山行と云うので一行張切っている。荒川小屋に昼前に来られるとは予想もしなかったので気分をよくして問題の急坂にかゝる。南には急坂が多いが、その中でも屈指のもの。平均勾配四十五度、前の者の靴が目の前にちらつく。声もなく諦めた様に登る。一時間で夜叉神峠と水平の位置になる。あと池山まで標高差六〇〇米。急坂も二時間で終り南ア独特の自然倒木の多い、暗い尾根を池山三角点に向う。爽快感を思わせる様な森林帯。三角点を過ぎると、急に残雪が現われ、ほっとする。未だ陽の高い内に池山小屋前のテント場に着く。

新築されたと云うこの池山小屋は、収容人員五〇名程度がっしりした作りで、冬期でも十分利用出来る。水場は溜り水であるが、炊事にはことかゝない位溜っている。

五月四日（快晴）　雪下二度

出発（五、一〇）—森林限界（六、四〇～七、〇〇）—ボーコン沢の頭（七、二〇～八、〇〇）—八本歯（八、四五）—北岳頂上（一〇、

〇〇〜一一、〇〇）ーボーコン沢の頭（一二、一五）ー池山小屋（一三、四五）

昨日に増す快晴・ザイル・アイゼンをもって出発。今日こそは白根三山を眺められると張り切るが、正に密林の中を行く如く、視界は鳳凰の方が眺められるのみ。一時間程登った所、初めて残雪多い間ノ岳農鳥岳の重々しい姿が荒川上流の深い谷をへだてて見える。カメラの一斉射撃。ころがる栃に苦こぶのが潤、うれしくては栃のない栃子。この辺の森林帯の残雪が一番多く五、六〇糎。偃松帯に出ると、背後に余り大きく富士が迫まっているので驚く。ボーコン沢の頭からは北岳バットレスの全貌が手に取る様に眺められる。ゴマ粒程の人間が二人、第四尾根にとりついている。〃今度の冬はこゝに決めた〃と林、関谷。稜線には、所々大きな残雪がある程度で、八本歯も何なく通過。アイゼン・ザイルを出すまでもなく頂上に立つ。

森林限界の少し上に、四人位は入れる岩小屋がある。又、森林限界から八本歯手前までは広い尾根でキャンプ・サイドには不自由しない。

五月五日　（小雨）

徹収（五、〇〇）ー出発（六、〇〇）ー荒川小屋（七、三〇〜九、〇〇）ー鮎差（一〇、〇五〜一〇、一五）ー夜叉神隧道（一一、二〇〜一一、四〇）ー芦安（一三、〇〇）

夜明け方、テントに当る雨の音に目が覚めたが、新品のミューロンだから心配ない。このナンバー！一〇のテントは初めて使ったわけであるが、前室を付けなかったのは失敗だった。冬山で使った場合、特に痛切に感じると思う。

雨も小降りになったので出発。急坂の下りは、下が濡れているだけに気遣りであったが、尻もよごさず、膝が笑うころ、荒川小屋に入る。急に雨が激しくなって来たので火を付けて小止みを待つ。九時小屋をとび出す。鮎差から一汗かいてハイカーで賑わうトラック道に出る。徒歩二〇分の夜叉神トンネルを抜けて旧道を芦安に下る。

（町田）

56 丹沢玄倉川　中止

57 谷川岳

係・関谷

参加者・平沢勇、田中奥、笹田英次、町田明、林武志、小田尚於、鈴木輝夫、関谷徹、米野弘躬、林春彦、松田朝夫、鈴木潤　計一二名

五月三一日　（晴）

一ノ倉南稜　林武、小田、関谷

マチガ沢旧道出合に設営。朝食もいそいそと一ノ倉南稜へ。散歩道烏帽子スラブも寝不足の一行には地獄の道だ。時間をかせぐために林、小田はハダシスタイルになる。南稜テラスで昼食。靴をはき、関谷、

林、小田のオーダーでアンザイレン・ワンピッチ直上し、右へ廻り込んでクラック下に達する。クラック下半をフリクションで登り右に出て直上、小テラスに達する。セカンド林がテラスに達した後急に小田が不調を訴える。少々休憩して見たが時間を大分喰ってしまったので引き返すことに決定。二ノ沢、滝沢のブロック崩壊をしばし見物しながら、ゆっくりと休息をとる。アプザイレンでクラック下、更にハーケン一本を打込んで南稜テラスに着陸。本谷バンドに出て、ブロック道を避け極力左にルートをとり下降する。岡谷トップで飛び降りたりすべり降りたり。「無茶するなよ」林のグチもついこぼれる。約一五〇米下ったところでアンザイレンして難なくグロテスクな雪渓上に移る。全く堅い雪だ。ザイルをといてグリセードでとばす。夕刻鈴木輝さんがラーメンの出前に来る。

六月一日（雷雨）

一ノ倉南稜　林、鈴木輝、岡谷

南稜テラスまでとばす。岡谷ー鈴木ー林、ワンピッチで昨日残して来たカラビナを腰におさめる。右にまわりクラックの昨日引き返したテラスへ。此処からザイルを三〇米のばして直上。不安定なところで確保する。コンテニアスでリッヂをたどり草付の凹角に入る。後続のN山岳会にルートをゆずろうとしたが、時間をつぶしきれず昼食を攝って出発。フェースを直上しリッヂに達すると六ルンゼ上部が見えて来た。約二〇米ザイルがのびる。すばらしい空も遂に雷雨に横取りされて、本谷はブロック祭の天下となる。リッヂ通しに先を急ぐ。鳥帽子スラブは全くのスベリ台だ。出合が足下に見える。空ではゴロピカ、足下ではブロックの叫び。六ルンゼ上部に入る。稜線から小田が元気ずけてくれる。雨も大つぶとなりルンゼもびしょびしょだ。体を動かすたびにジュクジュク水がしたたる。靴までがアワを吹く。ニピッチでルンゼを出た。盛んに苦心しているN山岳会パーティついに悲鳴をあげて「すみませんザイルをー」と来た。林はトップをジッヘルしてやる。全く無茶なパーティだ。雨はヒョウに変り雷は叫ぶ。ザイルを解いて草付に入る。腹ペコの鈴木輝さん遂に音を上げて五ルンゼの上で第二の昼食をとり、雷に追われる様に一ノ倉岳至由肩の小屋へ。小屋で小田と会い再びフランスパンの配給。我々を何と間違えたのか「パンですか、ありがたいですね」と手を出したのがH大山岳部新人。後で上級生にシボられるだろうと同情しながら雨の中をマチガ沢六ノ沢へ下る。クレバスも少くグリセードの四機編隊無事帰幕。相変らずのドシャ降りに火もたけずパンに明けパンに暮れた今日を冷いジュースで乾杯だ。

（岡谷）

西黒尾根　小田

六月二日（晴）

マチガ沢

早朝平沢、田中実以下八名が着く。日曜日ともなると相変らず人が

多く、数えきれない。

出合から百米位で雪渓が現われる。途中二〇米程きれるが、あとはずっと続いている。余り人が多いのでグリセード練習の場所がないのではないかと心配したが、それ程のこともなく、キックステップの練習をしながら三ノ沢へ入った。

午前中いっぱいを此処で猛練習する。

午後は、雪がくさってきたので場所を移し、三ノ沢対岸の本谷で行う。雪はずっと堅い。旗を立て、制動滑降練習。割合上達が早く総仕上げに移る。危なコースの滑降と停止・ガスが発生し始め人影がまばらになってきた。一応五米以内で止れる様になったので、練習を終る。人影は全くない。

林（春）は膝のバネが悪いのか中腰になれず、平沢、田中に助けられて下る。他は元気で練習の成果を発揮していた。

テントを撤収し、直ちに土合へ下る。林（春）は土を踏んでから、元気回復し、かけ足で下りた。

（林　武）

58 八ッ岳　地獄谷本谷

係・米野

参加者・笹田英次、鈴木輝夫、米野弘躬

七月一四日（曇時々晴）

清里着（七、二五）—美しの森下（八、五五〜九、三五）—スキー場入口（一〇、〇〇）—地獄谷入口（一一、〇〇）—権現沢出合（一二、二五〜昼食〜一三、〇〇）—地獄谷本谷に入る（一四、二〇）—高巻き開始（三、四五）—ツルネ（四、二〇）—切戸（四、三〇）

前日迄雨がふっていて当日の天気も危い様な状態だったが、どうやら天気らしくなった。清里を下りると高曇りだったけれど雲の往来がはげしく一雨は覚悟していたが、いゝ具合に一日中降らなかった。

美しの森へ行くハイカーと共に歩んで森下迄、こゝで朝食をしたゝめ左へ廻って沢に向う。今迄の人ゴミの中の感じと違ってこの附近には我々の他は仲々見かけない。牧歌調の中をあちこちとまよいながらともかくも沢に入る。

いつもより水の流れが多いのかせゝらぎの音も大きい。权現沢の出合で昼食をとり本谷に入る。両岸一杯に水が張っている所が多く乾いている岩が少い。足のすべり具合も仲々良い。本谷の三段の滝の少し手前迄はなんの事なく行けたが三段の滝の少し手前から両岸がせまくなり水が多く下に苔がついていて少々おそい。三段の滝にとっついて一段はこえたが二段目は高巻き三段目をながめると、高巻き、登行共に不能と判断、この位置からツルネから派生している尾根へ取り付くことにする。水量が少なければなんともなさそうだが、右も左も苔と水、ルートらしいものも水の中だし天候、時間共に大事をとって無理せずにすませる。ツルネ迄は踏跡をたどってゆっくり登る。最後にハイマツ地帯にぶっかりそれをつき抜けるとツルネだ。こゝから切戸迄は一走り。切戸では人の多いのに一驚、ツェルトを張って食事をすま

せ、明日の下山路を考えるが立場も水量豊富だし皆が早くに帰らなければならないので赤岳行者を至て下る事にする。

七月一五日（晴時々曇）

切戸（七、〇〇）—赤岳（八、三五〜九、〇〇）—行者小屋（九、四五〜一〇、〇〇）—美濃戸（一〇、五〇）—農場（一二、一五〜一二、三〇）—八ッ平（一、四五〜一、五〇）

風が強く霧はげしく雲の動きも早い。尾根上は相変らず人の列、どっちをむいても人ばかり、八ッ岳も沢にでも入らんといけないらしい。赤岳から行者に向う頃時々ポツリ、道が楽になる所迄はとばすことにする。この辺りはゆっくり下ってもいゝが行者から農場迄の道は長いホコリと中途はんぱな夕立と、日照りになやまされながらやっとの者で農場へ、バスの都合が悪くて八ッ平へ、八ッ平へついた時はグロッキー、考えたら昼食もまだだ。食べ始めたらバスが来た。それ乗れそれ芋野だ、それめしだ。何だか計画からはずれた山行になってしまって行った私達もがっかりした。天候がまあまあなのがキズに至。塔土重来を期して東京に向う。（笹田）

59 剱岳合宿

係・林（武）

期日・八月一日〜七日

参加者・(L)町田 明、林 武志、小田尚於、関谷 徹、飯塚康史、鈴木 潤、中山 惇、京田守弘、高橋邦夫、坂田幸彦

八月一日（快晴）

宇奈月（八、三〇）—軌道—樺平（一〇、一五〜五〇）—隧道入口（一二、〇〇〜一三、三五）—阿曽原（一四、五〇〜一五、三〇）—仙人谷降り口（一七、二〇）

上野駅での見送りは近年稀なる盛大なものであった。先発の関谷と荻生駅にて合流し、総勢一〇名のパーティとなって宇奈月下車。樺平までの軌道は、オサルの電車の如く可愛らしいものでなんとなく楽しくなる。晴天のもと素晴しい黒部渓谷を見下して樺平へ。こゝより阿曽原までの軌道は再度の交歩にも不拘乗せてもらえないので、隧道入口に腰を据えて昼食。鍛治氏より戴いた西瓜をデザートとする。隧道内を一時間余、電車とのすれ違いはかなりのスリルがある。トンネルを出てから阿曽原峠まで急登する。軌道の交渉や乗れなかった事などで時間を潰したため、予定の仙人池まで行けず仙人谷降り口でビヴァーク。テント一張りに一〇人をタタキ込む。

八月二日（晴）

仙人谷（　　）—稜線（　　）—池ノ平（　　）—二股（　　）—真砂平（　　）

仙人谷の豊富な残雪を蹴込んで稜線に出る。正面に剱岳北面がものすごい偉容をもって現われた。青い空、灰色の岩、白い雪、緑の這松

白い雲。これらの素晴しい調和。左すれば仙人池、右すれば池の平へだらだらした下り道を池の平小屋へ。こゝで羊羹をやつつける。小窓の雪渓は一ヶ所切れていて捲いたが、あとは快適な下りで二股着。この二股から見る三ノ窓はチョイトいける。二股から鈴沢左岸を上ったり下ったりするいやな道を行けばやがてにぎやかなテント村のある真砂平である。我々はこゝに仲間入りして明日より定着合宿を開始する。

八月三日　（快晴）

B.C（六、二五）—平蔵出合（七、〇〇）—途中滑落停止練習—平蔵コル（一二、一五〜一四、〇〇）—平蔵出合（一五、三〇）—B.C（一六、〇〇）

軽く体操をして出発。今日より山岳タイムと称して時計を一時間進める。しかしこゝに発表する時刻は平常タイムに換算してある。定着第一日、今日も良い天気だ。東京から胃の調子の悪い鈴木（潤）をキーパーとする。平蔵谷に入ったが非常に雪が堅いので出合より三〇分位の所で滑落停止の練習約一時間半。再び登りはじめたが、高揚の調子悪く小田が出合まで送り帰す。雪渓の細くなった霧岩の陰で昼食をとる。雪面からの乱反射は空からの日光にもましてはげしい。一服してから滑落停止を復習し稜線へ向う。稜線直下の手頃な所で四〇ザイルダブルのアブザイレン練習をする。二時平蔵コルを辞し、グリセード下降開始。新入にとっては全くはじめてのブッツケ本番である。林、岡谷、小田が四、五〇米下でかまえ、上で町田リーダーが教え一人づつ滑らせる。というシステムでちびちび下る。しかし本番だと真剣そのもので出合に着く頃にはかなり上達した様だ。

（小田尚於）

八月四日　（快晴）

B.C（五、一〇）—長次郎出合（五、三〇）—Aフェース取付点（七、四〇）

Aフェースの取付点までは全員一緒に来る。こゝでAフェース、Cフェース、八峯上半の三パーティに別れる。

①六峯Aフェース・林、京田

取付（八、〇〇）—縦走路（一〇、二〇）—六峯（一〇、四五）

正面のルンゼは上部の草付のハング突破が困難に思われたので、右側の斜のバンドから草付のルンゼへ入ることにした。バンドの下で林—京田とアンザイレン。一〇米程しっかりしたスタンスを登るとリッヂに出、更に一〇米直上する。ホールド・スタンス共に豊富。あまり安定した場所ではないが確保する。傾斜はかなりあって、長次郎谷下方に面しているので高度感は申し分ない。オニピッチは細いが可成りしっかりしたスタンスの得られるルンゼへ入る。五米で草が出はじめたのでこれを逃げて一旦左のリッヂへ出たが直登は困難なので二米程登って再びルンゼへ戻る。草付や大きな浮石に苦しめられながら登る。三〇米弛どいっぱいで適当なアンカーレッヂに出る。二パーティがこのフェースに取付いている。天気も良く展望は素晴らしい。鈴岳頂上、

源次郎尾根、剱沢の向うに立山……　セカンドの姿は未だ見えない。大きな浮石に苦しんでいるらしい。ニピッチで主な部分は終ったのでシーソーで京田をそのまゝトップへやる。傾斜もグッと落ち這松が多くなってくる。這松帯に入ってからコンテニュアスで頂へ出る。前のCフェースに小田、飯塚のパーティが調子悪いらしくアブザイレンをしている。縦走パーティもすぐ上のピークに居る。一〇米のアブザイレンで縦走路に降りる。短い登攀であったが精神的疲労を感じ、六峯への登りは気だるかった。六峯上で縦走隊と合流。

（林　武志）

②六峯Cフェース　・　小田、飯塚

取付（八、一〇）—引返点（九、四〇）—七、八峯コル（一〇、五〇〜一二、〇〇）

Cフェース左方を三ピッチ程登ったが小田の頭痛がひどくなったのでアブザイレンで下降した。長次郎雪渓をつめて八ツ峯の七、八コルに出て他のパーティと合流する。

（小田尚於）

③八峰上半　・　町田、関谷、鈴木（潤）、中山、高橋、坂田

B・C発五・一〇。長次郎谷も急になる頃新人は一列横隊にさせられキックステップでみっちりしごかれる。快晴の空に浮き出る六峯A・C両フェースをじっくり眺めてからA・Cフェースの両パーティと別れ岩のガラガラした所を五、六のコル目がけて登る。コルで確保の方法を説明。関谷—高橋、鈴木（潤）—坂田、町田—中山の順で三パーティに分れてアンザイレン。ガリーを中に思い思いにルートをとり岩になれる棒つとめる。滑落する場面もあったが困難な所もなくガリーも終り右側の壁にとりつく。壁も一ピッチで通過。ザイルをしまいあとはたゞ息を切らしてふみ跡をたどるだけだ。冬苦しんだスバリ岳を中心に後立山から槍、立山と自愛に浮き上っている。一一時から一二時半の間に三パーティ、続いてAフェースのパーティが六峯に集りこゝで昼食。フランスパンはむしゃむしゃ食べ水一滴口にせぬ関谷を見て高橋曰く「関谷さんパンと水とをとりかえっこしましょう」にはダアー。七峯の下りで一五米アブザイレン。七、八のコルでCフェースをあきらめたパーティと合流。八峯の登りは道をはずして一寸てこずる。八峯は一〇米ばかりザイルをフィックスし長次郎側を捲きぎみに下る。浮石が多くいやな所だ。八峯と頭とのコルで少憩後長次郎をグリセード。例によって小田、関谷、林（武）が先に下り新人を一人づつ下すシステムだ。BC着一六時四〇分。

（関谷　徹）

八月五日　（曇後小雨）

①長次郎谷左股　・　町田、中山

B・C（五、五〇）—長次郎出合（六、一〇）—長次郎コル（八、三〇〜五〇）—剱岳頂上（九、一〇）—本蔵コル（一〇、〇〇）

四日間続いた晴天も今日は朝から高曇り。長次郎出合にて正午に本蔵コルで再会することを約し源次郎隊と別れる。出合から左股上部を見ると、態岩あたりは雪渓が極端に細く大分割れている。先を案じながらキックステップが続く。四日間の疲労蓄積のためかピッチが上り

ない。熊岩を過ぎる頃からあやしかった空も遂に降り出した。源二郎二峯がすぐ左手に近ずき、源次郎隊に裏側から声援を送ってみた。熊岩の上で雪渓の傾斜は緩くなり巾もこの谷で一番広くなって雪原に来た感じ。コルの岩陰で昼食も早々に級頂上に向う。頂上で二峯フェースに人を探すも分らず、雨も強くなって来たので混み合う道を平蔵コルに向う。小雨の中、カニの横這いで四〇分も待たされ、ガクガタしながら避難小屋に入る。一段と激しくなった雨に源次郎隊が寮ぜられる。

（町田　明）

②源次郎二峯・林（武）、関谷、飯塚、京田

長次郎出合（六、一〇）―源次郎稜線（九、一五～三〇）―剱岳頂上（九、五五）―平蔵コル（一〇、二五～一一、三〇）

長次郎出合で長次郎隊と別れ、平蔵へ入る。天気は思わしくなく、降られることは必定だ。先日見ておいたS字雪渓（実はS字雪渓より上の沢）に入る。雪渓が切れているので右手のガレを登って又雪の上に出る。雪渓は二分し、しかも切れている。折からの雨をさけてシュルンドに入り昼食。雨も一応やんだので再び歩きだす。雪は稜線まで続いていて目的とする岩が見当らない。S字を間違えたらしい。右岸の岩も面白そうだからこれを登るか、それとも二峯までもどるか、と考えたが天候を考慮してこのまゝ稜線へ出、頂上を通って平蔵コルまでとばすことにする。稜線まで来るとガスの向から下の方に二峯が望まれ、反対に顔を上げれば頂上に人の姿が見える。くやしいやら、はずかしいやら……ガラ場を登ってキリションの頂上に立ち、直ちに下降。天気が悪いので登って来る連中がなく気楽だった。平蔵避難小屋で長次郎隊と会う。

町田氏と協議の結果、町田、関谷で南壁をやり他は帰幕とする。一たん上った雨も我々がグリセードを終る頃になって降り出した。南壁が気になる。

（林　武志）

③南壁A_2・町田、関谷

BCへ下る林道と別れ基部でアンザイレン。関谷―町田の順でたゞちに登行にうつる。おしとやかだった雨がいさゝか強くなり凡まで出て来た。取付から二ピッチは浮石も少く傾斜も適度にあって気分満点。但し雨水が目鼻耳口へとび込んでくるのはいたゞけない。二ピッチ目で時間節約のため吊上げを行った。ルートを左側にとりすぎたようだ。オ三ピッチも左側によりすぎ浮石だらけのハングしたところへつきあたってしまった。右往左往したものゝとても登れない。思い切って（リッヂは凡雨が強い）右へトラヴァスしリッヂ通しに登る。このあたりからは傾斜もたいしたことなく落石が気になるだけだ。雨ですっかりのびた「岩たけ」をBCへのおみやげにとむしり取る。剱岳頂上は捲いて平蔵谷をグリセードでBC。

（関谷　徹）

④キーパー・小田、高橋

⑤下山・鈴木（洞）、坂田

八月六日　（小雨後曇）

①ジャンダルム　・　町田、小田、高橋

Aチムニー取付（一二、三五）ー一峰の肩（一四、四五）ー二峰引返点（一五、三〇）ー道松バンド（一七、三〇）ー三ノ窓（一七、四五）

ジャンの巻道の上三米程のAチムニーの真下でジッヘル。一五米ピッチで才一ピッチはチムニーの中をホールドスタンスを求めながら登り、一五米一ぱいでチムニーが一旦切れて右手のテラスに出る。テラスの上のリッヂも行けそうだが、再びチムニーに戻る。これから上は極端に奥が狭く、口の開いたチムニーになり、而も右は湿っている。然し岩質は硬く、高度感がないので気は楽だ。セカンドのTはオマジナイを云いながら登って来るので、自然ジッヘルする手に力が入る。チムニー最後のピッチはザックを吊上げ不安定なチョクストンを越せばチムニーも終り一峰の肩までリッヂ通しに二ピッチ。ガスが濃くなり三ノ窓雪渓の白さも見えない。二峰にかゝるが頂上直下でチンネの方にコールを送ると、〃もう少し〃と返答があり引返す。一峰の肩からCクラックを三〇米のアブザイレンで道松バンドへ。姿は見えぬが林と飯塚の腹の減った声が三ノ窓でする。三ノ窓雪渓の上で五人が一緒になったのが六時近く。

（町　田）

②チンネ中央チムニー　・　林武、飯塚

取付（一二、二〇）ー中央バンド（一三、五五〜一四、一五）ーbクラック（一四、四〇）ーチンネ（一五、二〇〜一六、一五）ー三窓（一七、三〇）

ガスのため取付もわからなかったが、二〇分程ねばってチンネの全貌を掴むことができた。

ジャンダルム側を登り雪渓が狭くなった附近で、雪渓を横断し浮石の多い草付を少し登ると中央チムニーの取付である。こゝで左方ルンゼに向う岡谷、京田と別れる。チムニーに入って五米位の所でアンザイレンする。チムニーといっても、外開きでルンゼと云った方が当りそうだ。最初のピッチはやゝ右寄りに登る。一〇米位は階段と同様で大したことはなく、それ以上はチムニーはハング気味のところがあり困難なので右へ二米トラバースしてリッヂの外へ出る。他のパーティのトップが、我々の間に入ってしまったので一寸わずらわしい。

才二ピッチは再びチムニーに入り、チムニー登りらしくなる。二〇米登ると、チムニーが終り右側に廻り込んで、チムニーの続きともいえるルンゼに入る。この廻り込みは、ホールド、スタンス殆んどなく、しかもやゝハングしているので体を小さくして登らねばならず、緊張させられる。ガスのため高度感がないので、幾分気楽だ。才三ピッチは階段も同様で大したことはない。才四ピッチはもうガラ場で二〇米で中央バンドである。食事の後bクラックへ向う。aバンドの末端より五米位手前に真直明瞭なクラックがある。これがbクラックだ。バンドの末端から取付くとスラブなので一寸難しく、ハーケンが三本程打ってあった。クラックは最初の一〇米は典型的なクラック登りで、

しかもホールドは中にしっかりあり、快適だ。それ以上はクラックが広くなり階段状となる。矢張りこゝも浮石が多い。飯塚がピッチを登りはじめる頃関谷の声が下から聞えてきた。難渋したらしく、ハーケンが足りないとか。この頃から各ルート共混んできた。オニピッチはルンゼ状のところを右に斜めに登り、三〇米いっぱいに出すと頂上直下の凹角に達する。これから頂上は一〇米、この時ジャンダルム方面より、ガスの中から町田さんの声。頂上に着いたらしい。こちらの状態を連絡する。チンネ頂上は誰もいない。関谷達を迎えるべく待つ。

余りおそくなるので、連絡用紙を置いて下降する。ニードル側を降り、狭いゴルジュを通って、ガレのひどい三の窓への路に出る。一歩毎にガラガラすごい音がする。ガスで下が見えないので何んとなく不安だ。三ノ窓に着くとガスで何も見えない。待っているはずの町田さん等の姿も見えない。連絡用紙もわからない。うす暗くなり気があせる。と、ガスの中のジャンの上から声がする。呼んでみると、町田さん等だ。ホッとしてザックを置く。ガスがうすれ三つの影がはっきりしてきた。

（林　武志）

③左方ルンゼ　・関谷、京田

林達と別れバンドを左へトラバース。左方ルンゼへのトラバースがうまくできない。少し下すぎたようだ。後からのパーティはトリコニー鋲をカリカリときかせて登っていってしまった。かなり上方からルンゼに入った様だ。関谷―京田でとりつきザイルトラバース二回でやっとルンゼに入る。ルンゼは傾斜も弱く、ガラガラした所でつまらない。右側の壁を登るべきだったかもしれない。四〇米いっぱいで中央バンド。コンテニアスでピナクル基部へ。林がbクラックにいるのが見える。aバンドもgチムニーも他のパーティでつまってる。しかも我々の前にはaでもgでも開いた方に入るというのがいる。もう一時間も待ったそうだ。待つ間にエサをとカンパンをやっつける。一六時もまわったころやっとのバンドbクラックのルートがあいた。aバンドは高度感こそあるが手ばなしでも歩ける所だ。確保地点から壁を直上してbクラックへ。ちょいと快適だ。Cクラックに一パーティ入っており時折り落石となる。我々の下にはbカンテのパーティがいる。しかも両パーティともbクラックに移ろうとしている。割りこまれては三〇分の損。大いそぎだ。ピッチでbクラック通過。頂上着一七、〇八、相変らずガスっているがキリショはおさまった。林達の伝言紙を見る。ザイルをたゝみ早々に下りに移る。チンネとジャンダルムのコルからグリセード。三の窓で町田さん以下と合流。

八月七日　（曇時々晴）

真砂平（七、四五）―剱沢小屋（九、四五～一〇、四五）―別山乗越（一一、二五～三〇）―雷鳥荘（一三、〇〇～二〇）―追分（一五、一五）

今日で合宿終了。このあとに続く現役合宿に残る者、帰京する者等々。宿に俗真砂平のB・Cを徹収し弥陀ヶ原へと向う。剱沢小屋のそ

ばの天幕場に関谷、高橋が荷物の番に残り帰京する京田、中山及び追分まで現役を迎えに行く町田、林（武）、小田、飯塚は昼食後直ちに出発。大いにピッチを上げる。追分の少し上に弥陀ヶ原ホテルという素晴しい建物が出来ていた。

追分で京田、中山のバスを見送り、美女平から歩いて来る現役を待つ。この広い弥陀ヶ原に密雲が低くたれこめていた。

（小田尚於）

夏山合宿を終えて

今回の合宿は新人を対象としての雪渓及び岩登り基本技術の修得と中堅会員を対象としたより高度の岩登り技術の養成とを主な目的として行った。定着四日と云う短期間に、この二つの目的に成果を上げねばならぬ点に苦心したが、幸にして、天候状態に恵まれ、而も中堅会員の協力的な活動によって新人対象の基本技術の修得は一応の成果を上げる事が出来たと確信している。然し源次郎二峰及び八ッ峰六峰のフェースをトレースする事が出来なかったからには今回の合宿の目的が十分に達成されたと云う事は残念ながら出来ない。

三本のフェースを放棄した事が、健康管理の不徹底とファイトの欠如の二つの点に連なっている事をよく反省すべきである。絶ゆまぬ健康管理と云う事は、今さら云われるまでもない事であろうが、心身の状態を常に健全な状態に保つと云う意味で、普段からもっと自分の体を大事にすべきだ。

又、妥協譲り合いと云った形でファイトの欠如が強く感じられたが、無鉄砲は決して許されるべきでないが、何物にもブチ当ると云う意気がもっとほしかった。合宿全体を通じて引締った気魄が感じられないものになってしまった点は責任を感じているが、各自の猛省を期待する。

（町田）

60 北岳バットレス

係・関谷

期日・八月一六日～二〇日

参加者・(L)林武志、関谷徹、鈴木潤、飯塚康史

八月一六日（小雨）

日野春（一、四〇）—横手（四、二〇～五、〇〇）—鼓湯入口（五、三五～五、五五）—赤薙沢（七、二五～八、四〇）—尾無尾根取付（一一、五〇）

列車が約一時間遅れて〇時四〇分日野春に着いた。直ちに鈴木を起し、荷物を分配出発する。天気は良くなくショボショボ降り始めた。柳沢を過る頃から睡魔に襲われ、鉄が火花を散らす度に我に帰る。行程は睡魔と暗さではかどらず、横手で昼食をとる内に明るくなり始めた。登山者がぞろぞろ登って行く。これ程賑かだとは思わなかった。赤薙沢大滝を右に大きく高巻く。岩小屋に出る頃から径は平坦になり流れに下る。右岸に濃り草の中をジグザグに登る。再び河原に出て左岸の梯子を登り急登少々で飯場に出る。三〇分程して尾無尾根末端の

二股である。睡眠不足を考えて早々に天幕を張り明るい内に床に入った。

八月一七日（曇）

尾無尾根取付（六、一五）―広河原峠（八、三八～九、〇〇）―昼食（一〇、三〇～一一、三五）―広河原小屋（一一、五〇～一二、〇〇）―B・C（一四、〇〇）

今日も相変らず曇だ。しかし、昨日よりも良いらしい。我々以外に二張りのテントが有る。

昨日分が沢山残っているので、余りのんびりできない。尾無尾根は予想通り仲々きつい。今日は睡眠不足が解消されたから良いが、昨日登ったらどうなった事か。尾根は最初やせているが、中程を過ぎると広くなる。時々日がさしてくるが、森林帯であるので、その暑さは大したことはない。長い急登にアゴを出しはじめた頃径は右に捲き始め、やがて縦走路へ出てすぐ峠へ着く。これで昨日のアルバイトの「峠」はすぎたわけだ。しかし未だ膝のガクガクする下りがある。下りの得意な連中だから速い。径は森林帯で歩き易い。膝がガクガクする頃ガレの横に出て、少し下ると水場に出る。幕営に充分である。これから径も草の中に入り、傾斜もなくなる。明るい河原で昼食にしてB・Cに向う。白鳳峠への径を見て少し行くと野呂川の右岸に移り、間もなく木の間に広河原小屋が見えた。小屋の前を通って池への径をたどり、支沢の右岸を径が登るところから大樺沢に入り、大きな岩石の間を登る。大きい荷物を背負っての沢歩きだから大変なアルバイトだ。ボーコン沢の頭から来る沢を過ぎると伏流となるので、こゝをB・Cとする。岩小屋迄一時間もかゝらずに行ける見通しだ。不安定だが、何とか石を積んでテントを張る。明日の登攀に備えて早々に寝る。

八月一八日（曇）

B・C（六、一〇）―二股（六、五〇）―e沢（八、二〇～九、〇〇）―dガリー取付（九、一〇）―引返点（一一、二〇～一三、三〇）―カッオブシ下（一四、二三～一四、四二）―二股（一六、〇〇）―B・C（一六、三五）

ガスで全然視界がきかない。二股直下から雪渓が現われはじめた。雪渓は一部分苦くなっているが大体つながっている。雪渓が切れてからガラ場を登る。ガスが晴れないと様子がわからないので晴れるのを待ちつゝ登る。e沢に入った頃ガスが晴れてきたので、ゆっくり観察する。緩傾斜部分と岩場とはハッキリ分れている。スケッチをし、写真を撮ってdガリーに向う。dガリー下の滝に取付き左にトラバースして右岸出て、リッヂを登る。アイスハーケンが打ってある。一ピッチで這松帯に入り、三〇米行くと平坦な砂地へ出る。こゝからガリーに入り、一ピッチ楽に登ると、草まじりのガレで、コンテニュアスで登る。右側の才四尾根は横に割目の沢山入ったフェースでdガリー側壁の登攀は難しそうだ。ガリーは草まじりの岩で一寸オゾイ。これを登りきるとマッチ箱が頭上に見える。これから上はガレ場で才五尾根

には出られそうなのでこれを登ることにする。こゝでトップを替り、鈴木、飯塚が出る。三〇米一つぱい出た頃直径三〇糎位の薄い岩がトップの足下から落ち、それが林の頭に命中し、林はこん倒。上の二人を停止させて関谷がかいほうし、大した傷でないことを確認して安定な場所に移し、安静にし、登攀を中止し、二人を降す。林を充分休養させ歩行可能になってから才五尾根にトラヴァースする。ガレを捲いてeガリーの左寄りのガレに入り、カッオデシの下で飯を食ってガレの下降を開始する。不安定な所だが割合早い。鈴木、飯塚を先に下し、林に関谷が付いてゆっくり下る。テントに着いて直ちに林を休かす。夕食は美味いカレーライスで林は相変らずよく食い先ず生命に別条ないことを確認した。

八月一九日　（晴後ガス）

B・C（五、五〇）―八本歯コル（八、五〇～九、〇〇）―昼食（九、〇〇～一〇、〇〇）―北岳（一〇、二六～一一、三〇）―白根御池（一二、二二～一二、五〇）―二股（一三、一〇～一三、二五）―B・C（一三、五〇）

大事をとって林に飯塚がついて休養。バットレスの登攀はあきらめて関谷、鈴木のみで頂上へ向う。

途中ガスが切れるたびにバットレス見物をする。写真をとったりスケッチしたり。もうちょいというところでガスったときのくやしさ。それでもバットレスでの各尾根、各ガリーの位置や大体の様子がわかってきた。五月の末あるいは六月ごろこの辺で合宿したらおもしろそうだ。eガリーにっぐガレ沢を右手から入れるとやがて沢は二分。左手をとる。これもやがて三分し水もなくなる。中央のをとったが上部が急なのでトラバースし右手の沢にはいる。上部は草付きとなっており楽にコルに出られた。関谷はボーコンの頭まで往復しボーコンの頭と八本歯とのコルに出たことを確認。バットレスは姿を消しキリションとなる。帝尾根をたどり北岳。赤ナギ沢で会った丫山岳会のパーティがにぎやかだ。待てども待てどもついにガスは切れず。バットレス上部の様子がぜんぜんわからないまゝに頂を辞す。小太郎尾根から草すべりをへて白根御池。こゝからは二股へ道がついている。長衛の岩小屋を見物してB・Cへ。朝から飯塚と林で作っていたというおいしい料理がまっていた。テントを撤収し広河原へ。立たずとも腰をのばし手をのばせば薪はいくらでもある。しかも平らな所へ寝られるんだ。盛大なファイアーを楽しみ花火で幕。　（関谷）

八月二〇日　（ガス）

広河原（六、二五）―白鳳峠（九、〇七～九、一五）―高峯（一〇、〇三～一〇、一〇）―昼食（一〇、四〇～一一、〇三）―賽ノ河原（一一、四〇）―燕頭（一二、二五）―御座石鉱泉（一三、四三～一三、五〇）―釣橋（一四、四五～一五、三〇）―平川峠（一五、四四）―穴山橋（一六、二五）

スッカリ食糧がなくなったので荷が軽く楽だ。白鳳峠への入口は一

寸荒れているので先を心配したがしっかりした径である。ジグザグに登ってニピッチ程で、左へ捲くと水場に出る。少し続いて捲き、左手の森林帯を登り右へ登って、ガラ場に出る。風が強く麦ワラ帽子が飛ばされそうだ。北岳はガスの中で、時々顔を見せる。ガラ場は思ったより長い。峠は森林帯だが風が強い。森林帯を抜けると草の生えたガレ場という感じ。頂上はガスで何も見えない。踏跡をたどり地蔵へ。やせ尾根を上下して行く。左は森林帯、右はガレ、風と共に雨が時々まじる。薬師への道と分れ左に下り、賽の河原に出る。こゝから右のガレを下る。途中から地蔵のオベリスクが見えた。急な径をガタガタ下り小屋へ出る。小屋下から左へ入り森林帯をだらだら捲いて行く。

台風が接近しているのか、登山者が少い。うす日がさすので少し暑い。下るに従い暑さが増す。一寸危険な所は鎖金、梯子があり、安全。燕頭からは急激な下りとなる。余り長い下りにいさゝかあきる。

径は御座石鉱泉の家の中を通る。雨が降り始めたので急いで下る。道路工事をしているのですぐ下迄トラックが入っている。里心がついたのか足は次第に速くなる。トラック道をとばすので足が痛い谷が広くなり、又狭くなると右手に釣橋がある。止ると足がズキズキする。飯を食って、釣橋を渡り、左へ河原を行き右へ登る。すぐ峠へ出る。あとはガタガタ下れば部落へ出て、穴山橋目指して下る。穴山橋に着くとやっと肩の荷がおりた気持がしてホッとした。

（林　（武））

61 槍・穂高岳

係・福田

期日・八月二七日～三一日

参加者・福田宏二郎、関谷　徹、（恩沢）

八月二七日（晴）

七尾（七、三〇～八、〇〇）―第五発電所（九、〇五～九、一〇）―二俣（一〇、一五～一一、〇〇）―千丈沢出合（一三、一〇）―北鎌沢出合（一六、四五）

七尾までバス。シーズンやゝ遅れたゝめか、空いている。営林局の林鉄が、第五発電所まで入るとの事。キスリングを預け、高校三年のおり歩いた道。チョッピリ甘い感傷につゝまれる。高瀬川本谷へと、道が南に向うと、谷はひらけ、東電の建築物が散在する。第五発電所にて、ザックうけとり、未だ続いている林鉄に沿って進む。相当に日照りは暑いし、久しぶりのザック若干肩に応える。二俣の東電取入口の小舎（二俣には、もう一つ山小屋が出来つゝあった）では、関谷の不出来な顔の為、歓迎される。こゝで昼食、道はようやく山道らしくなり谷はせばまる。釣橋を渡り、湯俣川への道と別れ、水俣川へ入る。こゝから見る北鎌は下部にひどいブッシュが見られる。末端からじゃあ、ひでえものだと思いながら天上沢へ入る。道は明瞭だ。北鎌沢出合近くの木場にて泊。星がスゴクきれいだった。

八月二八日　（雨）

夜半よりの雨は降りつゞいて居る。朝になっても止まなかったら、天上沢をつめて明日槍より独標往復後北穂まで行き、日程の狂は無いと云う事にして寝子を見る。やはり駄目で天上沢をつめる。道は所々不明瞭であるかどうと云う事もない。問題は風を入れるとガタの示る事である。必然的にピッチが上る。天上沢上部に雪渓有り北鎌尾根は黒々とそびえ立って居る。稜線近くなると雨は横なぐりとなる。東鎌の取つきより殺生への巻道をとり、坊主の岩小舎へと下る。槍沢人子一人見えず静かなもんだ、岩小舎見かけによらず中は広いが、風通しはベラボーに良い。

八月二九日　（晴　午前中風強し）

雨は上ったが風は強い。ひと気の無い槍沢を登り、殺生小屋前より槍、穂高の縦走路への巻道がある。ここでザックデポ、ザイル等必需品を持って槍の穂先へ向う。穂先より北鎌独標へ往復の予定であったが、見下す北鎌尾根どうもつまらない。北鎌を中止して一旦肩まで下り、小槍へとりつく。風が強く、手がカヂカンで気分は良くなかったが、右端リッヂ通しに五米ばかり登り、ハーケンの打ってあるフェースを左へトラバースしてクラックに入る。クラックを直上し、抜け出たテラスより、三米ばかり、リッヂを直上、左へまわりすぐに頂上。見た感じが悪かったが、とりついたらどうと云う事もなかった。下降は、ニピッチの懸垂。

肩に来て居た黒沢と合同、肩にてエサを喰う。ザックデポ地点に戻り、飛騨乗越へ向う。

縦走路もキレットの下りにかゝると相当悪く、ザックがあっては相当のアルバイトだ。下手にバテられない。北穂についたのは六時頃か、頂上にて、シュラーフにもぐる。

八月三〇日　（くもり）

福田、関谷、ドーム中央稜に登るべく、才三尾根を下降、T_2 より中央稜 T_A へトラバース中、福田が食当りの為か吐し中止、北穂へ帰る。午後涸沢へ下りた。

八月三一日　（晴）

上高地へ下る。

（二八日の雨で時計が止り、二八日以降のタイムは無い（福　田））

62　西朋祭

係　・　鈴　木（潤）、　米　野

期　日　・　八月三一日～九月一日

参加者　・　笹田英次、町田　明、鈴木輝夫、松田朝夫、見里朝規、渡辺　亨、加藤鈴夫、鈴木　潤、林　武志、小田尚於、米野弘躬、飯塚康史、京田守弘、木下康夫、林　春彦、山中富佐子

「カンパイ！」の声と共に第二回西朋祭が開幕された。九月一日午前零時、所は我々古くからの思い出の小屋 ―― 塩地谷小屋である。

二百十日にも拘わらず年に一度のお祭りとあって台風も姿を見せぬが参加者は定刻近くなるにつれて増し開幕時には十四人と云う数がそろった。メムバーの顔ぶれを見ると久々に渡辺、月里、加藤等の顔も見られる。しかし両田中を始め山口、平沢等の勇士の姿が見えぬのが一寸さびしさを感じさせる。

そのさびしさも始めの内だけでいろりの大鍋がブツ〳〵音をたて『般若大明神』のお神酒が皆に廻る頃になると山男の気炎も多いに上る。大鍋の中身は係苦心の作〝暗闇鍋〟で何が入っているのか全く不明である。皆恐る〳〵ボールに取っては奇声を上げている。

「ドヂョウが睨んでいるぞー」

「こりゃー何だい？」「そいつはラスクのなれのはてだよ」

「この肉は堅いなー」「くぢらだよ」

出るわ〳〵カボチャ、メンチカツ、シャケ缶、いわし缶、etc……。中には身元の明らかでない怪なものまで飛び出し大騒ぎである。だがその味は実に天下一品である。腹も定まりメートルが上ると何処からともなくメロディーが流れ始め、皆美声（？）を張上げる。民謡・山の歌等が切れ目なしに続く。その内に夏山のエピソードや会員の名前を折込んだ変な歌などが飛び出し大いに沸く。

時が立つにつれて宴もしだいに静まり所々にノックアウトされた姿が見られ始める頃に外には朝の気配が感ぜられる様になった。

ついにS・O・I三人の宴に変った頃には秋雨が静かに降り出した。が何時しか三人の勇士も朝の静けさに溶込んで行った。

昼近くなって全員マろって朝食に付く。二日酔が二、三「ポーッ」とした顔をしている者も見られる。朝食は焼きのり、つけ物などさっぱりした物ですます。その途中秋雨煙る中を山中、林(春)と続いて姿を現わす。

昼過ぎ「般若大明神」を中心に記念撮影をし無事西朋祭は幕を閉じたのである。

（米野）

寄附

一、金百円也　・福田君　一、ニッカー本

一、金二百円也　・田中(将)君　一、ベーコン・鈴木(輝)君

一、同右　・岩崎君　一、ジュース・松田君

一、清酒二本　・笹田君　一、りんご　・林(春)君

西高山岳部近況

▼四月一〇日　本年度顧問先生は左記五名と決る。
岡崎　正、平山清太郎、篠崎　武、平山良吉、中沢ナミ子

▼(96)川苔山新人歓迎会　四月二一日
平山(清)、篠崎、岡崎先生、(OB)林(春)、笹田、林(武)、小田、米野、岩崎、亀山、京田、(現役)山岸、沢野、関谷(興)、田中(憲)、今井、木原、中村(乙)、蟹沢、植木、橋本(鋼)、中村(晃)、杉浦、浜谷、石田、(新人)兼田、秦、小林、大石、小木、上野、梶内、橋本(章)、原田、市吉、川田、他二名　合計三九名

▼(97)乾徳山　五月一九日
岡崎、平山(良)先生、(OB)林(春)、鈴木、林(武)、岩崎、(現役)関谷(興)、田中(康)、沢野、木原、今井、中村(晃)、橋本(鋼)、杉浦、植木、秦、小林、上野、梶内、原田、川田、高山(利)、田辺(和)、林(隆)、大石、小木、鈴木(秦)、中村(秦)　合計二八名

▼六月中旬に予定されていた恒例の丹沢合宿は流感のため学校側よりの指令で中止した。

▼(98)剱岳夏山合宿
(教師)岡崎、平山(良)、中沢
(OB)安藤、田中(将)、町田、小田、林(武)、関谷(義)、飯塚、高橋(邦)
(現役)田中(康)、関谷(興)、今井、沢野、橋本(鋼)、駒井、杉浦、植木、木原、秦、梶内、原田、川田、小木、藤田、高山(利)、田辺(和)、林(隆)、鈴木(秦)　合計三〇名

八月七日(ガス後雨)　美女平(一〇、三〇)―追分(一五、三〇)
(幕営)
八月八日(豪雨)停滞
八月九日(雨後曇)　追分(八、〇〇)―剱沢(一六、〇〇)幕営
八月一〇日(ガス)　剱岳往復、グリセード練習
八月一一日(ガス)　A班、男子、グリセード練習、午后愚直下降、編隊基本行動の練習(田中康顔面裂傷負い二針縫う)
B班、女子及び教師、安藤、立山―一ノ越―地獄―帰幕
八月一二日(快晴後雨)　剱沢(七、〇〇)―二股(一〇、〇〇～一一、三〇)―池平(一五、〇〇)
八月一三日(雨)　池平(八、〇〇)―阿曽原(一一、〇〇)―下山

今回の合宿は学校側から日数の制限を受けて居たこと、天候が悪かったことなどから黒部横断白馬岳の予定を変更し、剱岳にて二日間の岩登り、グリセードの強化を行った。表面は貧しい合宿であったが、内容としては西高山岳部再建にふさわしい合宿であったと云える。各指導的立場の充実は一部を除いて充分な合宿形態であったが、

教師に運動部の一つである点を認識してもらえなかったのが、我々の最大の手落ちであった様に思う。

▼八月廿五日付正部員推薦

田中康弘　関谷興雄、今井義治

▼三高懇親会、於西高生徒集会場　八月二五日

豐多摩高一〇名　富士高一〇名　西高二二名　合計四二名

▼九月二日付

(14)主将　田中康弘

副将　関谷興雄（総務）、今井義治（会計）

食糧係　沢野　徹、　器具係　駒井　洋、

和装係　塙本鋼太郎、　トレーニング　中村乙丙

医薬係　植本美邦

▼春山合宿は、明春三月北岳池釣尾根の予定である。

堆 石 抄 （1957.4.1 ～ 9.1）

NO	山 行 名	月 日	備 考
1.	川苔山西高新人歓迎会	4. 21	平山(清)，篠崎，岡崎先生，林(春)，笹田，林(武)，小田，米野，岩崎，亀山，京田，（池田）西高部員25名（内新人11名）
2.	東 鞍 岳	4. 28 ～ 29	松田(朝)他
3.	(54) 浅 草 岳	4. 28 ～ 29	小田，鈴木(輝)，関谷，成瀬
4.	北岳バットレス	4. 28 ～ 5. 4	川口 他
5.	(55) 北 岳	5. 3 ～ 5	町田，笹田，林(武)，松田(朝)，鈴木(潤)関谷
6.	立 山	5. 1 ～ 5	山口 他
7.	源次郎沢	5. 12	田中(実) 他
8.	甲斐駒ヶ岳	5. 18 ～ 19	鈴木(潤) 他
9.	乾 徳 山	5. 19	岡崎，平山(良)先生，林(春)，鈴木(輝)，林(武)，岩崎　西高部員22名
10.	谷 川 岳	5. 27 ～ 28 5. 26 ～ 30	田中(将) 川口
11.	(57) 谷川岳	5. 31 ～ 6. 2 6. 1 ～ 2 6. 2	林(武)，小田，関谷 鈴木(輝) 平沢，田中(実)，笹田，町田，松田(朝)林(春)，米野，鈴木(潤)
12.	川 苔 山	7. 7	鈴木(潤) 他
13.	(58) 八ッ岳地獄谷	7. 14 ～ 15	笹田，鈴木(輝)，米野
14.	つ ゞ ら 岩	7. 28	林(武)，京田，高橋
15.	(59) 剱岳真砂沢生活	8. 1 ～ 7 8. 1 ～ 5	町田，林(武)，小田，関谷，飯塚，高橋，京田，中山 鈴木(潤)，坂田
16.	西高剱岳合宿	8. 7 ～ 13	岡崎，平山(良)，中沢先生，安藤，田中(将)，町田，林(武)，小田，関谷，飯塚．

NO	山行名	月日	備考
			高橋，部員 19名
17	(60) 北岳バットレス	8. 16 ～ 20	林(武)，関谷，鈴木(潤)，飯塚．
18	聖・赤石岳	8. 25 ～ 31	川口 他
19	(61) 槍・穂高岳	8. 27 ～ 31	福田，関谷（西高黒沢）
20	(62) 西朋祭	8. 31 ～ 9. 1	笹田，鈴木(輝)，松田(朝)，町田，見里
			渡辺，加藤，鈴木(潤)，林(武)，小田，
			米野，飯塚，京田（木下）
		9. 1	林（景），（山中）

後記

○春からの山行を振り返って見よう。浅草岳、一ノ倉、地獄谷、八ッ峰六峰Cフェース、北岳バットレス、北鎌等といずれも中途半端の山行の連続ではないか。このまゝで良いだろうか。

○スポーツは勝敗を度外視せねばならないと云う。しかし登らんとして、易々として後退し回避することは、必ずしもフェアとは云い得ない。その陰に数々の情性がかくれていると云っても過言ではない。登らずんばの意気がない・スポーツはフェアであればある程、勝たねばならない。登山は登ることにある。

○一期二期が無能なら無能で良い。指導的立場にある四期の中に未だ安易さに妥協し、困難から逃げようとする者が何人か居る。五期、六期の甘さは此所にある。再び云おう。このまゝで良いかと。

○お互いに社会に学窓に多忙な身だ。原稿の書き方位気をつかってもらいたい。特に福田、林(武)に忠告する。

（MASA）

西朋報告 一三号
昭和三三年一一月一〇日
都立西高山岳部OB会
西朋登高会
事務所・東京都中野区大和町一八〇 田中方
TEL・(38) 〇八七五